

むかしのあかり ~あかりと道具~

私たちはいま電気・ガスが使用でき、照明や暖房がスイッチ1つで点く、便利な暮らしをしています。昔から、「火」は人々の生活になくてはならないものでした。暖をとるため、お湯を沸かしたり料理をしたりするため、あかりを灯すため、そして害虫や危険なものから身を守るためなど、人々はさまざまな場面で「火」を頼りにしてきました。

火の利用

電気を使っていなかった時代、人々は暗い夜をどうやって照らしたのでしょうか？

大昔の人々が暗闇を照らすために使った初めてのあかりは、木や草などを燃やした「たき火」であったと考えられています。たき火はあかりとしてだけでなく、食べ物を煮炊きしたり、体を暖める役割を持っていました。また、木の先端を燃やして「たいまつ」をつくり、あかりを持ち運んで使用していました。



あかりと生活

あかりの燃料として用いられたのは、木などの自然材料だけではなく、木の実からとれる油を燃料にしたあかりが広まっています。

江戸時代になると、菜の花の種からとった「菜種油」の生産が盛んになっていき、また、琉球（現在の沖縄）から「はぜ」と呼ばれる植物が入り、ろうそくの材料として用いられるようになっていきました。

明治時代以降のあかりは、石炭や石油を燃料として使用したり、ガラスを加工して街灯やカンテラなどをつくりはじめたことで、あかりは飛躍的に進歩していきました。

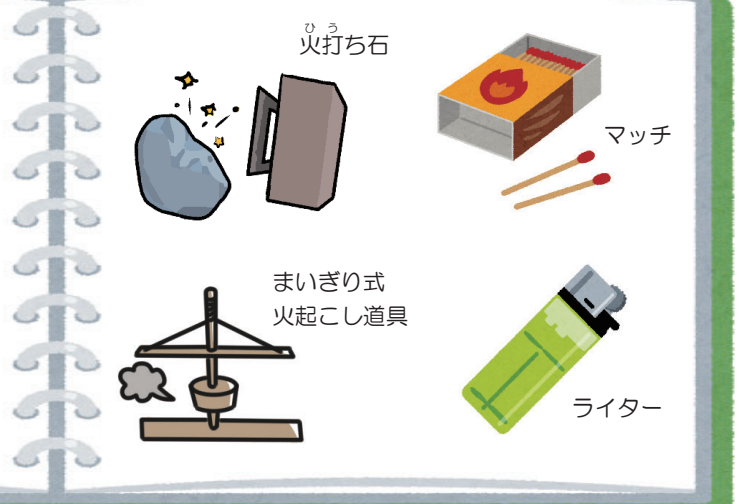


コラム：火をおこすための道具

まだマッチもライターもないころ、どのようにしてその「火」を得ていたのでしょうか。

1つ目が、石と石、あるいは鉄と石を打ちつけて火花を散らし、その火花から火をとるもので、この道具を「火打ち金」「火打ち石」といいます。

2つ目は、摩擦によって熱から火をおこす方法で、木と木をこすり合わせることで「火」をつかっていました。



あかりの道具

とうみょうざら 灯明皿

灯火をつけるための油を入れる皿のことです。元々は灯明皿に入れた油に直接火をつけていましたが、のちに灯芯をつけて点火するようになりました。



ちょうちん 提灯

提灯は足元を照らすために持ち歩いたり、標識として店先などに備え付けたりするものです。

初めは木枠や籠に紙を張ったものですが、次第に細い竹ひごの骨に紙を張り、中にろうそくを立てて使い、折り畳めるようにした提灯ができました。



カンテラ

カンテラは明治時代に石油を燃やして使う、持ち運び用の道具として広まりました。

ブリキ、トタン製の缶に芯を立て、これに裸火を灯すものや、四方ガラス張りの角型の枠つけたものなど、色々な種類があります。



あんどん 行灯

行灯は、夜の間に周辺を照らす道具で、油皿の火が消えないように、木枠に和紙を張って火袋としたものです。

元々は、手に持って移動できるもの（手提げ行灯）でした。提灯や手燭が普及し始めると、室内に置くための照明として庶民に普及していきました。



がんどう

手持ちで使う道具で、現在の懐中電灯に相当します。上下左右どの方向にも動かしてもろうそくが直立状態になり、火が消えないような工夫がされていきました。



しょうだい 燭台

ろうそくの普及にあわせて、ろうそくを立てて灯す道具として様々なかたちの燭台が作られてきました。

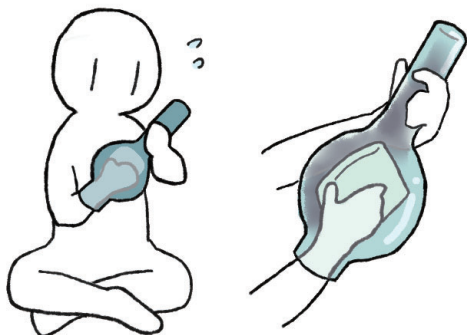
元々は油とろうそくが両方使えるものでしたが、次第にろうそく専用になっていきました。手燭は燭台に取っ手を付けて持ち運べるようにしたものです。



こどもの仕事

電気によるあかりの道具が普及するまで、石油ランプは日々の暮らしを明るく照らす役割を果たしていました。

ランプには風を防ぎ、炎を安定させるために「ほや」がついています。毎日使う石油ランプのほやの内側は、石油が燃えるときにでる「すす」で黒く汚れてしまいます。「ほや」は細く小さいため、掃除は手の小さな子どもの仕事でした。



コラム：和ろうそくと洋ろうそく

和ろうそくは、「はぜの実」をしぼって作られた「はぜろう」を使用して作られるろうそくのことです。

和ろうそくは一般的に使われる「パラフィンろう」と比べて、炎が大きく、ろうが垂れにくいという特徴があります。ろうも芯も全て国内で作られたものが使用されます。

